

あらすじ

峽の大立者として知られた宋家村の保正(村長)、宋江の娘宋雪華は、仲間の幼なじみ五人とともに北の大国遼、そして西の西夏との交易で、政和元年(西暦二一〇年)に遼兵崩れの賊に襲われた村の復興を図っていた。政和三年(西暦二一三年)、そんな雪華のもとに女真族の完顔部の族長阿骨打と、その弟呉乞買が尋ねてきた。阿骨打は、契丹族の遼に虐げられている女真族を独立させる大望をいだいていた。そのために、雪華の力を貸してくれと頼みにきたのだ。どうして……。誅する雪華に、阿骨打は、遼で交易の情報収集をする聞起から聞いたと言った。聞起は雪華を支える五人の若者の一人で騎乗の天才だ。聞起を我が子のようにかわいがる阿骨打を、雪華は信用した。阿骨打が遼に対して叛旗を翻した際に、宋国境で騒ぎを起こして遼軍をそちらに引きつけてほしい。そういう依頼だった。悩んだ末、雪華はその依頼を引き受けた。阿骨打の想いに共感をおぼえたからだ。河北で叛乱を起こし、帝国を築いている田虎を動かす。雪華はそれを計画した。

だが、その会談を盗み見ていた者がいた。李吉というその男は、三年前に賊の襲撃を受け殺された保正の娘が、遼の軍装をした将校と密談していると考えた。その情報を、かねてから雪華の持つ交易網を狙っていた太原府の大商人、魯權に売り込んだ。魯權はその情報を歪曲し、宋雪華が遼と手を結んで太原府を襲おうとしていると、知府(府知事)の黄文炳をそそのかした。黄文炳は驚き、部下の袁偉を宋家村に向かわせた。雪華をおびき出して太原府で捕らえることが目的だ。雪華は騙され、太原府の牢営で拷問を受けた。全身を焼かれるという苦しみに耐え、雪華は最後まで膝を屈しなかった。

雪華を救え。三年前から宋家で働く無用が立ち上がった。封印していた双斧を取り出し、雪華の仲間石勇とともに太原府に向かう。無用は、かつて百人斬りと恐れられた黒旋風李逵だった。さらに、聞起は遼に戻って、同じく雪華の仲間、美貌の女剣士黄玉に知らせた。聞起はそのまま阿骨打に救援を依頼する。

※地図添付

太原府では、雪華の仲間曹瑛が異変に気づく。曹瑛は頭がよく、交易の中心的存在だった。女ながら書にも計算にも長けていた。その曹瑛が、隣に住む商人の蔣唐、そしてなぜか雪華の救出に力を貸してくれる袁偉の三人で、多くの食客が守る魯權の屋敷に突入した。

牢営の鍵を奪うためだ。李吉に陵辱を受けた曹瑛は、傷ついた身体と心を奮い立たせて、雪華を助けるため壮絶な戦いを繰り広げた。犠牲も出したが、曹瑛は鍵を奪い、たまたま魯權の屋敷に踏み込んだ李達、石勇とともに雪華を牢営から救い出した。

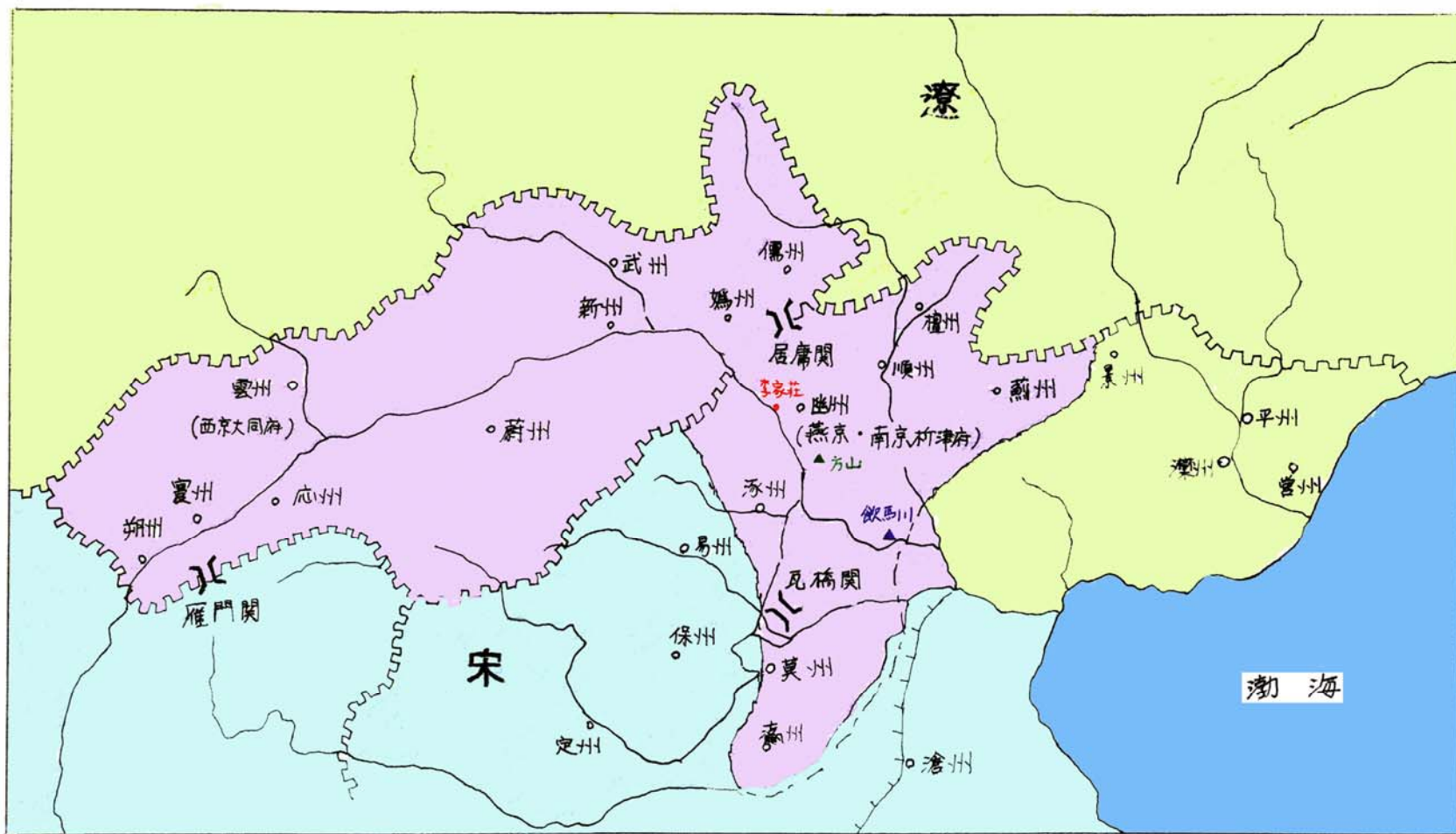
半死半生の雪華を背負い。李達、曹瑛、石勇は絶望的な脱出行を続ける。襲いかかる太原府廂軍。やがてもう一人の仲間、西夏との交易を担当する陳統と、勝手に雪華を嫁にするといい張る晁蓋が救出に向かう。だが、太原府はついに禁軍(正規軍)まで動かした。李達はかつての部下を招集しこれにあたらせるが、多勢に無勢、状況は悪化するばかりだった。

打つ手を失った時、遼から黄玉がやってきた。剣の天才、天女と見まがう美貌を持つ黄玉が、禁軍の将を討ち取った。一気に流れが変わった。さらに聞起も現れ、禁軍は大混乱に陥った。その隙に雪華を逃がそうとする李達。だが、禁軍もあまくはなかつた。そこに黄頭女真族の硬軍が突入した。圧倒的な戦闘力を誇る硬軍の前に、太原府禁軍は流れに呑み込まれる木の葉のように消し飛んだ。硬軍を率いていたのは阿骨打の弟呉乞買。はじめて見た時から雪華に恋心をいだいた呉乞買は、激しく李達を叱責した。はじめから黒旋風であることを魯權に示しておけば、恐れてここまでのことは企まなかつた。そう叱つたのだ。項垂れる李達。

だが、太原府を脱出しても追っ手は諦めない。雪華嬢さんを早く医師に見せたい。李達は決断を下した。死んだ部下が籠もっていた亀伏山。そして、その近くにいますのはずの入雲竜という緯名の医師。嬢さんをその医師に委ねる。李達は雪華とともに、黄玉、曹瑛、聞起、陳統、石勇の五人の若者、そして晁蓋を連れて亀伏山に向かった。

首都開封府からも禁軍が送られて、亀伏山への攻撃が熾烈を極める。雪華達は助かるのか。今、壮絶な攻防戦が幕を開けた。

燕雲十六州
  宋
  遼



※この物語に出てくる宋、遼、燕雲十六州の勢力図(拡大)



宋、遼、燕雲十六州を囲む周辺図 (拡大)